



一猷蝕太平樂記

拾三

~ 13
3553
13



門 13
號 3553
卷 13

厭蝕太平樂記卷十三



一 兩將軍御陣廻り之事

附 關東方其田足弟之事

一 幸村軍配為ふ南之事

附 互代多宮討死之事

太平樂記卷十三

早稲田大學 圖書館
昭 33.11.10 受
藏 書

いさむあんとはねをささりては怒りて
伊豆に軍をいざさる出陣して天下太平に
唱うぞうを陣廻りとききの百をさる心は
よく新御軍に休まされ回世の友
市所出陣の多しとよの御給ふそ
孝ふ公の御出まうと南志保正出
武者とめて鉄炮者三百人下づ二行
あま御る百張子代り物以十騎めり
抱の人救をりれて行列そ八幡大菩薩の

もこの本隊を五百二行に列し旗本松平
下保ちの救をりて自分の弓鉄炮抽下
藤本水野隊を三百人武蔵回部さて
舟をひがし次ふ公出まの百とくお南光
坊右衛門土井大炊出たり井上たらし後
高平屋敷を松平親女隊あぶら振隊
酒井宗元を合して一万八千人又五千
たりてお善代の大老格を人供をさる
おく尾崎屋又たらしお免から罷りて老

由山あふ田一とる 又河辺川に於て
お軍の出巡見あり 西乞の向井なる村
本多中務大守 回兵卒以 西尾隠岐守
戸田をいふる 本多の兵衛もたつを
あ跡日向の 後下 永井下野も 松平之徳も
洪砲より出獲あり 回兵 大出ふおかりたれ
るさる 又城田よりいさるをゆく母公
秀頼公巡見あり 一とて 先十五六才の
り袖の女中おれく うちとくまをいの後を

あうさきぢり 急んのだをい 金のれ
竹のた力をとまきく おをさね 菊
白阿をのそく 花さけ 髪吹くやう 阿ふ
速あ甲斐守 今木源ふあり 相渡よ 阿ふ
物より 瀧田 浅井 大野 海辺おあり 秀頼公
之伴 南條 中務 大守 福崎 周防守 三伴
牧崎 玄由 政あり 四伴 八後 若 隠岐守 次お
五七の相のそく の大をい なるい びや
たんのろく 洪砲 五換 換 五換 換 七換

五郎御秀形公抄列のほ陣ふ、本村
後之、主計も、何處も、平野に
あつて、忠田み子、後之、本山、長
抄部、結信、あり、本丸、山科、まき、あり
降者、勿論、あり、福軍、あり、御所、あり、者、あり
あつて、お母、子、内縁、の、えん、く、お供、え
ま、する、存、村、山、礼、あり、て、実、入、り、松、嫌、心
う、う、い、お、え、列、を、定、り、て、お、母、子、敵、陣
あ、つ、た、り、つ、お、同、一、や、う、の、六、文、祇、の、藤、山、中

ろ、り、阿、事、い、つ、う、ふ、と、お、あ、り、ふ、る、お、ま、上、幸、村
あ、り、り、上、に、敵、方、の、六、み、せん、の、藤、の、後、に
え、字、ち、ま、き、お、き、か、り、を、お、ま、を、お、ま、に、お、ま、
通、之、お、の、子、形、の、せん、あり、つ、ま、併、り、ま、し、い
私、櫻、ろ、り、つ、ま、て、之、お、河、内、ち、ろ、り、お、七、才
あ、い、十、五、才、父、何、豆、子、お、去、年、お、果、私、お、あ、の
通、り、お、ま、お、五、年、位、易、上、田、を、ま、退、き、り、御、り
え、才、お、南、軍、子、あり、つ、ま、て、ゆ、く、終、ふ、對、面、い
つ、た、ら、り、あ、ら、ん、定、め、て、お、供、を、仰、り、付

らましたるまとおらへし中い金足の藤とあり
 中い戦場のあつし藤原の時討控りて
 ありこそまはすしめりて藤立てり
 時を敵方のいふ藤の藤入る時
 ろて討へりしと信じて幸村様とて
 仕せりしこそ軍師の礼なりとめ
 幸村よりさしと涙をちがひ泣けり
 涙をちがひしは誠中の人と
 みのけり陳中の子を何れ
 幸村よりさしと涙をちがひ泣けり
 涙をちがひしは誠中の人と
 みのけり陳中の子を何れ

幸村よりさしと涙をちがひ泣けり
 涙をちがひしは誠中の人と
 みのけり陳中の子を何れ
 幸村よりさしと涙をちがひ泣けり
 涙をちがひしは誠中の人と
 みのけり陳中の子を何れ
 幸村よりさしと涙をちがひ泣けり
 涙をちがひしは誠中の人と
 みのけり陳中の子を何れ
 幸村よりさしと涙をちがひ泣けり
 涙をちがひしは誠中の人と
 みのけり陳中の子を何れ

是れ新武者の出衆あるべし大子の一夜
 坊主など討て候りせん時記の公事
 のふ運筆始むてこれハ貴筆立きしこれ
 こそ運筆の家康公なる想し天下由土の
 神下地の阿久戸ゆ貴筆立て天下由土の
 此筆はけきいふいふんせしと敵の是一筋
 つけ武者記やきしとこうらとて一とて
 幸よめ御小玉を込して今やと待長より
 時ふ公出たりとて諸大名の陣をく巡視する

長柄より山子山討面あり一とて白乃
 山合に松平武藏守陣あり見とらり
 兼約あり此ふと来りたひて志田河内守
 陣をおりおろし一とて是とてまたる地見
 ろひていそき山見たりて是とて陣をたを
 おろしかうちふ無りしと記しるふ汝らきり
 ざうやと仰らる思ふと上はらひけし承知
 仕りしれこれと伯父よりいその阿久戸
 意外仕りぬとて城をお出ぬ一とて

ありしを今も遣ふまうせして後原にゆき
 づくとまはれぬ人おぼゆる遠の都のこゝろ
 陳冠をそへておきしとよる公もこゝろめ
 せりゆめり糸うなよぬが伯父ゆ何角
 んまをらるるをまうざらるるが喜れあまぞ家の老丹
 何とぞやうりざらるるやむ子のゆく熱
 仰るそお手のむらむ出のふ時幸村
 一ノ目目をむぎを登りておろくる百八柳の
 枝をらりふさうりてゆし玉たりやまはあまの

の下をおぬきするのむらさけけたをらるる
 二殿大野孫ハいぜんみぬ公は横原のひて
 あやうきまぬのがまぬふ集田をぬこそお
 り張念ふ方といたびに又のぐたり英
 舞いままいさむとあゝ運のさうんあつたより
 何事先傳へ又ま直と能申どのまきこり
 こそづーとの由便立たれ又傳立立列
 をまぬそち公ハやうて居あひての下知し
 時ふたつ目のむぎきをやうて生田はゆ足系

三百より城小直くよせきつる時の声ゆて
 縁原^{ゆかり}せせんとのぞむ共^{とも}田^のそ^こに^に討^{たたか}んを
 つ^つ向^{むか}つ^つ法^は士^しと^とあ^あて^てて^て君^{きみ}ふ^ふつ^つく
 年^{とし}ころ^{ころ}ま^まゆ^ゆつ^つふ^ふを^をら^らん^んて^て命^{いのち}を^をお^おま^まが^が
 ち^ちせ^せ信^{のぶ}た^たが^がひ^ひふ^ふこ^これ^れを^をま^まの^の人^{ひと}あ^あり^りま^まる^る
 こ^この^の事^{こと}は^はお^おた^たむ^むあ^あふ^ふり^りあ^あり^りま^まる^る幸^{ゆき}村^{むら}に^にま^ま
 仰^{おほし}せ^せふ^ふま^まう^うせ^せい^いつ^つあ^あり^りま^まる^る時^{とき}ふ^ふ大^{おほ}助^{すけ}の^の御^ご抱^{かか}
 死^しつ^つせ^せく^くく^くを^をら^らん^んを^をお^おて^てり^りら^らん^ん共^{とも}田^の大^{おほ}助^{すけ}
 幸^{ゆき}安^{やす}き^きり^りこ^こが^がと^と弟^{あに}ふ^ふり^りた^たり^りに^に君^{きみ}の^の御^ご存^{ぞん}公^{こう}の

の仁^にを^を以^もて^て己^{おのれ}を^をし^しの^の親^{おや}親^{おや}た^たら^らぬ^ぬ以^もて^て
 法^は炮^{はう}城^{じやう}と^とを^をあ^あふ^ふ尤^{なほ}討^{たたか}ん^んふ^ふ何^{なに}の^のか^かき^きし^しり^り
 阿^あん^んそ^その^の事^{こと}は^はお^おつ^つく^くと^とら^らぬ^ぬの^のご^ごて^てし^しり^り
 と^とて^てあ^あつ^つて^て河^か内^{ない}の^のち^ちが^が懸^か白^{はく}と^とし^しを^を射^や
 け^け下^げ恐^{おそ}の^の流^{なが}は^はき^き中^{なか}か^かお^おと^と大^{だい}地^ちふ^ふあ^ある^る
 け^けり^りそ^その^の時^{とき}東^{あづま}内^{ない}に^に大^{だい}助^{すけ}が^が懸^かの^のあ^あき^きに^にな^な
 射^やん^んた^たが^がひ^ひふ^ふ南^{みなみ}の^の程^{ほど}を^をあ^あら^らん^んり^り
 時^{とき}ふ^ふ安^{やす}き^き第^{だい}の^の御^ご存^{ぞん}を^をあ^あら^らん^んり^り共^{とも}田^の
 足^{あし}弟^{あに}ふ^ふあ^あり^りま^まる^るに^にて^て延^{のび}び^びせ^せら^らぬ^ぬ由^{よし}

たらぶしとのみなりこれふゆへは内きり
 主命^{しゅめい}をまじり引^{ひき}たておしいとてあの山^{やま}を
 こんど入^{いり}ひ秀^{ひで}れおけむる命^{いのち}たきけり
 してこまじ又^{また}つらよめての病^{やま}ありに引^{ひき}たて
 して引^{ひき}たりとて山^{やま}をえりてちかくむ
 けいあるが病^{やま}をたすてけいおく御^みたが
 くだんをのまぎと出^いりたりとてこまじさいぜん
 志^しるまたらしりハゆきまづ一^{いつ}汝^{なんぢ}おろ一家^{いっけ}のまの
 どもハ何^{なん}とて引^{ひき}の如^{ごと}く勇^{ゆう}まをくれたらむぞ

たらぶしとのみなり父^{ちち}の子^こなり父^{ちち}の御^み命^{いのち}を
 たらぶしとて引^{ひき}たておしいとてあの山^{やま}を
 こんど入^{いり}ひ秀^{ひで}れおけむる命^{いのち}たきけり
 してこまじ又^{また}つらよめての病^{やま}ありに引^{ひき}たて
 して引^{ひき}たりとて山^{やま}をえりてちかくむ
 けいあるが病^{やま}をたすてけいおく御^みたが
 くだんをのまぎと出^いりたりとてこまじさいぜん
 志^しるまたらしりハゆきまづ一^{いつ}汝^{なんぢ}おろ一家^{いっけ}のまの
 どもハ何^{なん}とて引^{ひき}の如^{ごと}く勇^{ゆう}まをくれたらむぞ

うせりふきくハ新庄布庄に遊ヒ
 尾崎大洞の山時代ハ大坂町人の山遊
 始のお軍の山遊に陣中出供を以て
 此城内ハおのまが持傷を以て免んとうか
 陣中法お海たり幸村ハ又此山遊
 いざれもこ免を大切ハ折返くハ油
 改ちきあふり身ハのり公ハ付對
 本橋の松平武藏者ハ陣中入ありて
 新お軍ハ濱辺より出入あり南老坊僧

向ち更しハ山父子師對面の悦び也ハ
 公ハ危難をのりして見ましハ志田河内者
 足弟が中務の山遊にさるるハねばさる
 新お軍ハ山遊にさるるハねばさる
 山遊ハ山遊にさるるハねばさる
 折ハ山遊にさるるハねばさる
 会点のゆるぬ次甘茶たりと仰せし事
 南老坊ハ山遊にさるるハねばさる
 うまハ山遊にさるるハねばさる

人さうくきくのねふぶぎのみりりま
 ねきまの幸村はよく芝草をこころみ
 けりうとぞんむまに内用をもちけり
 馬侍もね十町を備へて君の御座お
 よくねいしとやされ今も新お軍を
 さいわせたのい芝草のさすあむ
 くだし液のさすのさすのさすのさす
 一々を天下を志る者らうちの芝草
 立させともい芝草をこころみ

幸村はよく芝草をこころみ
 ねきまの幸村はよく芝草をこころみ
 けりうとぞんむまに内用をもちけり
 馬侍もね十町を備へて君の御座お
 よくねいしとやされ今も新お軍を
 さいわせたのい芝草のさすあむ
 くだし液のさすのさすのさすのさす
 一々を天下を志る者らうちの芝草
 立させともい芝草をこころみ

皇居跡をこもりて見ゆらとらたづねきこ
うと祖居跡ありとてんくたふしとてさき
ゆく志まぶらゆら小隠室に居る
皇居跡ありとて祖居跡ありとて
を問ひし皇居跡を問ひて君の居るおの
とよ草屋まよそまよ居るまよまよ
ゆらと居るまよまよを以て志まゆと
りさきまよゆらまよ祖居跡もまよまよまよ
てそゆらまよ祖居跡を皇居跡にまよまよ

出ろりて皇居跡を皇居跡に
の基ひとて祖居跡に
めぐりて天下のまよ居るの位あり
んで居るまよまよまよまよまよ
あゆまゆらまよまよまよまよまよ
の片桐の跡ありて祖居跡のまよ居るまよ
て祖居跡のまよ居るまよ居るまよ居るまよ
のまよ居るまよ居るまよ居るまよ居るまよ
何まよ居るまよ居るまよ居るまよ居るまよ

流地ひより付々事と松崎久吉史五百人自
の筒を忍びて意をておけらるは四百百計をそ
矢勢あり一御言の是よりあがりてお軍一
塔のころびに落のい出供の急へあて
あまき、助けあがりてちりてそれの出籠子
あまきび出籠をわらうてたぐひよあそれ
たむひて出籠ごころだんよあよあ城中
まハ幸むり卯方松崎よあ黄まきつ尻
あくつる運命はきん重をてのとまきと

のぐん浦じと松崎松崎ハお換りて大い
つらそそむみを奉りてきぞふ打てあんと
つらそを幸むり割りてこれおあまら海
せしむるあつと止めたり死すお東お軍
あまきハ夜ふりて東あかの還御ありあ
忍里そそ東の守は西の海をさ出通りあると

幸村軍配周ふ南の事

けり 屋代多宮村死のり

幸田幸村ハ天王地姫の路おこころあ

まり今所還御の途中討つと手勢は
定むるまづさる兼松の仲崎民戸本所松の
赤松伊豆守堀田は仁木大膳為保倉は
伊豆守波守星合は物崎玄常亮出丸より
伊木七郎左衛門は生駒常力に
て百挺ぐ五挺は備へ合初今所定め
て打出る是物見え出て松子を
兵隊出れば後陳了兼松は後益又兼松
聖次部下の勢合せて子五百人を三方に

伏つしりも五挺目角五挺世目世目角松
挺は少角五挺挺お相見えと助と小川
お佐守五挺人世目世目の角挺と片挺
あ備へて本所松村は子五百人但し
三百人づつ三手に備へ伏勢とありと
方を助人と五挺人松炮にあし一回堀
口は七挺我部宮内少輔末五百人あし
先よりおれを助んと小川治中兼松あし
同所保倉は小吉田大助子五百人松炮備へ

いあふ回ひまに失あつる方を助たすけんと和なむすたる
五拾ごじゅうくあふ回ひまに星せい合あふ後ごに陸りく岐ぎち彦ひこ田た
集あふ人ひと郡ぐん大だい子こふ五百ごひゃく人ひとあふ回ひまに失あつる
方かた助たすけんととて未ま田た監かん物ぶつあふ回ひまに
志し田た家け臣しん浅せん野のたふ妻つまつ子こ五百ごひゃく人ひとまふ回ひまに
つげいりる方を助たすけんと持もちたり五拾ごじゅうく
あふ回ひまに馬うま河がに聖せい月げつに水みづ鏡かがみ子こ瀬せた
及およ川が八は箇がふま五百ごひゃく人ひとあふ回ひまに
標めがねふ大だい箇がを仕し懸けん手てふりしる大だい勢せい力の時ときを

切きてとちる人ひとと別わか意いするあ又また城しろの松まつ回ひま
ふいあ村むら之の計けい以もてあふ回ひまに
祐すけ崎さき新しん母ぼあふ回ひまに相あ中ちゆう吟いん民たみ部ぶ之の兼かね松まつの
糸いと土つち手ての中なかあああ赤あか松まつ仔こ豆まめち本ほん所ところ松まつ力ちから
お手ての内うちあ伏ふり仁に木ぎ大だい腰こし亮りやうに堀ほり苗なえのあお手て
の肉にくあ伏ふる物もの崎さき之のああ亮りやう星せい合あに伏ふるあ丸まる
より仔こ木ぎちりああ伏ふる生い新しん帯おび刀たがひ馬うまつ口くちの
あふ回ひまにしるああああをまら後ごに陸りく岐ぎ守しゅ
望もち月げつ仔こ木ぎちりああああの火あひのああああ守しゅ

お又ぬけ乃々田々根は甚八日之り物
増田兵衛曰三七海合清海入乃日伊上入
大物とて二手ふころまて一手い生玉の東
上五百人を家ふころまて一手い生玉の東
ころれころ時ふお島の大名を打はた七
々お一ふ時の声をとどけて土手かおお切て
出ろよ云折々の首を抜く折ぬる徳大者警
さうと云い乃々れども増は其池田石川之将
是をうちとてんと云る藤橋をあらんと横

おつおを後乃々又々事あり五百人 在三手ふこけ
て伏居ててなみおころ々大勢を中おお込て
討々まて云ぬれころまておをまて討るも云方
の勇士命を擧げ戦つにらせ手討つころの
戦を志すころまて戦つて徳大者つまてし
とあ一おの増田本町橋保奈口星合口惣力
出ろてあり又る満より計りてをせ出ろと
あるは本村が三傳一淺野が三傳一長官我部
三傳一太助が三傳一望月が三傳一後乃々が

之傳へ七傳へ少勢ありて大軍戦とりありき
ちせ戦し陸奥ちか伝ち海野福崎毛利
馬田細川か後立元有る福崎傳後ち伝あ
家井伝多き海井本多柳原松平あ野
か先陣惣ぐるまといるあふ生田が恐の者
諸方ふ火を懸てたぐ一交みやけとりけれん
こ戦何ると伝ゆと戦ふ事いとなく惣ぐる
まふあるふ伝後多本村をち一免七手の二三
三手とら後陣を先とておい討みむらひ

時幸村ハ八方よ勢を満りて秀頼公に
本村ま計以出供より素廻し知りて
よわぐんハ天皇ちをさして出陣し
伝大名陣あしよるふ出陣本計を
清水のてきこきこりあふあふ忽ち海野
入る足矛少向を五折挺ちて無る出供の
後いたをれて死むる者救を志ぐばお軍
のあつ悦ひおふありあつたをれ々お
安藤常力成頼集くちせつてやうお

ちやう山羽織陳三控へ歩行の成て引つ
みへ引ゆく深谷なる兄弟もせしめ矢
代多宮とよ者山供の中か山陳三羽織
長一へお軍こまきよる返一合せゆく
知るも新深谷兄弟もせしめ突お
陳三羽織屋ぶらつて引く一引ゆら
穴なる小洞たりぬき村よるまれば
將軍よりつある年暮の首あり歎
いとちやうの者ありこまき返して
陳三羽織

陳三をそつておまよふまねをいざ
こまき長身がくらの首ありとぞ
茶臼山より新深谷なる山洞窟
の危事長知をたむいて大御所の御事
め何と出ぬおまよる急よあはれ
合せのよ大勢の討まてくる中
くまづまるとまきやうもあ
を何こけつておまよるけ
新前池田毛利お井お跡
お跡お跡お跡お跡お跡

以陳分り皆獲失は上兵まきくうしまそ
 手は飯所の名をみるり口借されどもを川ハ
 せだ川に今ま本はちんと位者天もちの
 濱寺村平理ハ元久室ちも物元崎（引）せ
 ありそ外城方ハ兵糧金銀兵悉獲下あを
 をむむりていさみまむりるり一は
 後居も皆我部へねを改め城由ハ入格取引て
 初又保奈口星合口の手と櫓を引用いた本村
 重成彦田兼相後居隠岐守望月之取生田

たら耐美田大物づらもも城中二の備は
 とう川を以て加賀陸奥河井後を本多
 あを突くづら一は方へおれ一中も大物
 ハ穴山少介三輪考之介をたふとてその
 勢子五百を以て丸く備へ柳原の陣地せ
 免くづら一上教佐川堀尾高橋勢を馳ちし
 云の由傳く切入たり梶子文ゆらまはる
 外ありと朋友少独くしとを傳り戦ひ
 穴山少物子の者下知して戦ひ梶子文物

孤姫のきくものこゝに討死をす方み大助
 本陣く切入りりある中務曰兵庫亦之
 ともゆるせ免致ふ百合あり亦神を武者亦
 こもふありて致くハ大助は降ふ五百騎を
 丸めて打て入を水石橋し亦日根強五平
 中を束法み帯刀松平七千印永井一学
 珍木新ハ七拾之入防ぎ死そ大助ハ公致
 己身を逃くく甲斐の庄政をりるん
 新母大助を防りともせん此くともし

つき新さ公押ぐるきいて逃たすハ大助ハ
 ともを逃くして逃りけハ中ふ降て討き
 者ハ松沙ハ公をさぐり子阿やうき時東の
 方の高田河内也足弟ハたせきこりて戦
 ひはるまゝいゝ城兵を討た大助ハ降みえれ
 くらぶまゝとさる知ハ穴山少助たすけ奉て
 今ハ是をと引てくる公ハ海幸の中よ
 まりて引めよさるまゝと弟ハ乙のめぎあふ
 少羽織おこるもおハ討たたまひいゝとお

女いつて引ゆき行てき欲あ死いわいくるろをき公あにあ声こを
 かけまひて予よハこふあうを欲てをおあるりとと
 まれと呼よこるまのふと角いハあまりみれく
 引ひくして涙をながし出い射し死あをぞもるま
 たらととあまりていふよおもいのほろ御ご運うん
 目め出でなととて出い射しをさくしらる公きのたま
 くはなの御ごのかを実れるとろりがし
 とありん状じ形けい出い太たカカーーづづちちれらり
 是この桑白はく山さん出い射し陳ちんをうて出親しん子こ出い射し面めん
 出い洗せんうまりる一いおの不ふのくとめふ々うま
 危あ手て難なんおもちまりてぬく恐おそまのふ
 出い大だい名め五ごの射陳ちん一いとあるいの恐まの
 又また出いしの出いソソみドくありますするみ地
 祝ゆくて悦よろこびのりる

厭蝕太平樂記第十三終

